様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520250
研究課題名（和文）　「南太平洋」という物語言説の変容と変奏

研究課題名（英文）　Transitions and Variations of ‘SOUTH PACIFIC’ as a generative discourse

研究代表者
服部　典之（HATTORI NORIYUKI）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50172937

研究成果の概要（和文）：南太平洋を舞台とした英文学作品を、18 世紀から現在に至るまで通時的に検証することによって、南太平洋という「場所」が英文学において持つ独特な意義を解明した。ユートピア幻想にいざなう憧憬の場である南太平洋(または 19 世紀までの用語では「南海」）は、イギリスという国家にとって植民の対象でもあった。さらに太平洋戦争が顕著に示すように、数多くの島々が点在する太平洋は、常に国家間の抗争を惹起する地であった。本研究は、英文学における「南太平洋」の意味の変容と変奏を明らかにすると共に、豊かな物語を生む幻想の地が、なぜ諸国家の抗争の誘因になったかという文化的理由を検証した。

研究成果の概要（英文）：By surveying various works of English Literature basing their scenes in the South Pacific, I clarified the specific significance the topos of ’South Sea’ holds in English Literature, especially in Defoe, George Forster, Stevenson. South Pacific was the much coveted targets of colonial desire of British Empire, whereas it is what entices writers to its enchanting utopian fantasy. This study elucidated the underlying cultural reasons the South Pacific has produced many works of English Literature and has followed the variations and transitions the meaning of the place has undergone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　英米・英語圏文学
キーワード：ガリヴァー旅行記、旅行文学、南太平洋

１．研究開始当初の背景

南太平洋を扱った文学作品の先行研究で代表的なものは次の三点である。①Robert Markley, *The Far East and The English Imagination, 1600-1730* (2006)。イギリス 17 世紀から 18 世紀前半までの文学作品である Dryden 作の *Amboyna* や Defoe の *Farther Adventures of Robinson Crusoe*、Swift の *Gulliver’s Travels* を当時のイギリス人の想像力と極東（Far East）の関係から論じた

もの。②Rod Edmond, *Representing The South Pacific* (1997)。ヨーロッパの芸術文化における南太平洋表象を、キャプテン・クックのハワイ原住民との諍いによる死(1779)からフランスの画家ゴーギャンのタヒチでの絵画作品(1901-3)に至る文化現象を概観する研究書。③Vanessa Smith, *Literary Culture and the Pacific* (1998)。主にスティーヴンソンの南海物語を、ブリコラージュという文学手法の観点から論じたもの。

いずれも優れた研究書で、これらの太平洋言説研究が本研究の学術的背景にある。ただ、1720～1770 年代の考察が上掲三研究書からは脱落していることは重大な問題だと考える。申請者は 1724 年に出版された Defoe 作の *A New Voyage Round the World* という南海への冒険小説を嚆矢として、キャプテン・クックの第二回航海に同行したゲオルゲ・フォルスターの航海記である *A Voyage Round the World* (1777、なおこの作品は研究代表者が『世界周航記上・下』(岩波書店、2007, 2008) として翻訳し出版した)に至るまでに、イギリスにおいて地理学上の認識論的転換が起こったという仮説を持っている。このことは申請者が司会を務めた、日本英文学会第 79 回全国大会シンポジア『空間表現の近代英文学――「旅立ち」と「到着」の謎』における自身の発表「南方へ: “Keep Still on SOUTHING” ――物語空間としての「南海」の発見」ですでに問題提起している。

認識論的転換とは、もっぱらイギリスが視線を向けていたカリブ海を代表とする西方向から、南海が代表する東方向へとそのまなざしを転回したことである。イギリスの植民地が、アメリカ合衆国の独立により、西インド諸島からオーストラリアやニュージーランドなどの東へと移った事による政治的転換がこの認識論的転回に関わっているのは、David Armitage が *The Ideological Origins of the British Empire* (2000)の中で「東洋に旋回する」と述べるように明らかである。だが、上掲の研究書を含めて、イギリス文化にとって極めて重要な 1720 年代から 1770 年代の文化変容を探る試みは未だ成されていない。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、1720～1770 年代の文学作品や航海記などを詳細に調べ、文化変容を解明することにある。本研究の第二の目的は、南太平洋物語の多様性を未発掘の文献も含めて探ることで、多彩な物語を生み出す空間としての南太平洋をあぶり出すことである。例えば、Defoe にとって南海は金・銀・パールを秘匿した理想的楽園であったし、R.L.Stevenson は、零落した白人たちが抗争に明け暮れ、結果として南海に住む現地女性たちに白人の富が環流する物語を書くことで、南海を白人が行ってきた悪行をあがなう場とした。それ以外の南海物語、例えばタヒチのゴーギャンを題材にした Somerset Maugham の小説 *Moon and Sixpence* (1919)など数々の物語を検証することで、豊かな文学を紡ぎ出す空間としての南太平洋の魅力を探りたい。第一の目的が南太平洋物語言説の「変容」を論じることだとすると、第二の目的は、その「変奏」を探ることである。

本研究の第三の目的は、南太平洋という空間を、イギリスを代表とするヨーロッパ人から一方的に語られる対象として捉えるだけでなく、南太平洋のポリネシア諸島に暮らす人びとがヨーロッパ人の来訪をどのように受け止めていたかを探ることである。フォルスターの前掲書 *A Voyage Round the World* は、現地の人びとがキャプテン・クックの来訪に対してどのような想いを抱いていたかを想像し表現する美質を持っている。ヨーロッパ人による書でありながら現地人の気持ちを思いやる作品を探り論じると共に、オックスフォード大学ピット・リヴァース博物館を調査し、ポリネシア人がヨーロッパ人をどう物語ったかを探りたい。

本研究の第四の目的は、南太平洋が文化衝突の場となった理由を探ることである。これはコロンビア大学の文献等の調査によって行われる。また、例えばスティーヴンソンが南海物語を書いたのは 19 世紀末であったが、日本人作家の中島敦は『光と風と夢』(1942)でスティーヴンソンが南海物語を書くプロセスを物語化している。中島は 1941-2 年に日本政府によって南洋のパラオに書記として派遣されている。パラオは北太平洋であり、スティーヴンソンがいたサモアは南太平洋であった。太平洋戦争はまさに北の日本と南の連合軍の戦いであったわけで、このような物語群を検証することで、衝突の舞台であった南太平洋の意味についての手掛かりが得られると考えられる。

３．研究の方法

研究計画・方法の概要は以下の通りである。まず研究目的の一に該当する 1720 年代から 1770 年代の文学作品・航海記の中で西インド諸島を扱ったものと南太平洋を扱ったものを徹底的に収集し精読することで、イギリスにおける「西」から「東」への認識論的な転換がどう起こったのか、そしてそこにはどのような言説の力学が働いており、どう変容していったかを考察する。また第 2 の目的を果たすべく、18 世紀以降イギリス文学の中で南太平洋を扱ったものを網羅的に収集し、南太平洋物語の諸変奏のかたちを明らかにしていく。第三の目的のためにピット・リヴァース博物館、大英図書館などに海外出張し、イ

ギリスと南太平洋の交流史や抗争の実態を調査する。最後に文化接触・衝突の場でもあった南太平洋の一つの例として、日本文学に書かれた南洋物語とイギリスの南海物語を比較することで、以下のような三者の文化・文学の有り様を探る。

４．研究成果

研究初年度の平成 21 年度には、イギリスの 1720 年代から 1770 年代の文学作品・航海記を国内外の出張により収集した。研究課題に関する計画として『ガリヴァー旅行記注釈』を岩波書店から出版するための具体的な打ち合わせ及び研究会を行った。また著者のスウィフトの研究及び資料収集のため、アイルランド共和国ダブリンのトリニティ・カレッジに海外出張をし、調査を行った。研究課題に関する国際学会である Johnson at 300 がイギリスのオックスフォード大学で開催され、海外出張により出席し、貴重な議論の機会を得ることができた。また同大学のピット・リヴァース博物館が所有するキャプテン・クックの第二回航海で収集されたフォルスター・コレクションを調査することができ、課題に関する知見を広めることができた。

当該年の研究により、イギリスと南太平洋の文化接触の実態に迫ることができ、「南太平洋」という物語言説の変容と変奏の研究の、基礎を築くことができた。論文の成果として、「南太平洋周航物語――スティーヴンソンの周遊するボトル」と「介護されるヒーロー――憂い顔の「スロー・マン」」を公刊した。

平成22年度は、引きつづきイギリスの1720年代から1770年代の文学作品及び航海記を、国内外の出張により収集した。

特に、9月にアメリカ合衆国ニューヨークのコロンビア大学に出張し、研究課題に関する書物・文献の資料収集を行うことができた。1888年からニューヨークを経由して西海岸から南太平洋に渡ったR.L.Stevensonに関する調査を行うことができ、本研究課題推進の上で大きな収穫を得た。

研究課題に関する計画として『ガリヴァー旅行記注釈』を岩波書店から出版する予定で、昨年に引きつづき、逐一確認を行いながら作業を行った。第１篇の「リリパット渡航記」、第２篇「ブロブディングナグ渡航記」、第３篇「ラピュタ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリッブ及び日本渡航記」、「第４篇の「フウイヌム国渡航記」まで一通りの作業を終えることができた。最終年度はもう1度全体を仔細に検討する作業を行い、出版を目指すことになる。

研究課題に関わる論文集『十八世紀イギリス文学研究（第４号）――交渉する文化と言語』の編纂に携わり、その巻頭論文として「南方へ“Keep still on SOUTHING” ――物語空間としての「南海」の発見――」を執筆し公刊した。

収集した資料の中で貴重なものとして T.C.Phillips著の*An Apology for the Conduct of Mrs.T.C.Phillips*(1761)があるが、この作品の検討と研究を行い、平成２３年度に開催されるジョンソン協会全国大会でのシンポジウムで研究成果を発表する予定をこの段階で立案した。

最終年度は、初年度と平成22年度に収集した資料の解析を徹底的に行うと共に、初年度と二年度に調査ができなかった地域のフィールドワークを行い、不足分の研究を補った。特に、イギリス18世紀文献所蔵量では世界有数のハンティントン・ライブラリーでの調査と資料分析が有益であった。また、東京に出張し、同分野の研究者と議論を深めた。それらの研究成果を、日本ジョンソン協会第44回大会（平成23年度）のシンポジウム（5月23日北九州市小倉リーセントホテル）で研究発表して、本研究課題の重要性を広報すると共に、有益な学問的議論を交わし、研究最終年度の総括的研究成果となった。日本ジョンソン協会は日本におけるイギリス18世紀研究の牙城であり、ここで本課題について発表の機会を得ることは、最終年度の総括として大変意義深いことである。また、初年度、平成22年度に引きつづき本研究課題に関する出版プロジェクト「『ガリヴァー旅行記』徹底注釈」の最終原稿を完成した。本研究課題の最終的成果として、この書物は平成24年度中に出版予定である。本出版のために、綿密な打ち合わせと校正を行った。また最終年度は『西洋文学――理解と鑑賞』（大阪大学出版会）を出版でき、研究成果を発表することができた。この中で服部は「話法と意識の流れ」と「名作味読セミナー――スウィフト『ガリヴァー旅行記』の二章を分担執筆し、成果を挙げることができた。論文成果としては、「「スコットランドとブリテンの狭間で――スモレットにおける正統と周縁」と『西洋文学――理解と鑑賞――』（共著）を公刊した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 服部典之、「レミュエル・ガリヴァーの悲惨と希望」、『IVY』42 巻、名古屋大学英

文学会、pp.67-90、2010年、査読有

〔学会発表〕（計3件）
①服部典之、「＜言い返す女＞テレジア・コンスタンシア・フィリップスの法と誠」、日本英文学会関西支部第五回大会招待発表（2011年12月18日、於　関西大学）②服部典之、「涙と冒険のカリブ――西インド諸島と18世紀英文学の諸相」、日本ジョンソン協会第４４回大会（2011年5月23日、於　小倉リーセントホテル）
③服部典之、「アビシニアン・ジョンソン」、ジョンソン協会関東支部・十八世紀英文学研究会第15回例会（2010年5月15日、於　専修大学神田キャンパス）

〔図書〕（計6件）
①服部典之ほか共著、「話法と意識の流れ」「名作味読セミナー――スウィフト『ガリヴァー旅行記』『西洋文学――理解と鑑賞』、大阪大学出版局、pp.67-79,pp.204-216、2011年
②服部典之ほか共著、「スコットランドとブリテンの狭間で――スモレットにおける正統と周縁」『スコットランド文学――その流れと本質』、開文社、pp.114-113、2011年
③服部典之ほか共著「南方へ“Keep still on SOUTHING” ――物語空間としての「南海」の発見――」『十八世紀イギリス文学研究――交渉する文化と言語』、開拓社、pp.2-18、2010年
④服部典之（編）ほか共著、『旅立ちのかたち――イギリスと日本――』、197 頁、2010年
⑤服部典之ほか共著「介護されるヒーロー――憂い顔の「スロー・マン」」、『英米文学の可能性』、英宝社、pp.603-614、2010年
⑥服部典之ほか共著「南太平洋周航物語――スティーヴンソンの周遊するボトル」『イギリス小説の愉しみ』、音羽書房鶴見書店、pp.221-239、2009年

６．研究組織
(1)研究代表者
服部 典之　(HATTORI NORIYUKI)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50172937